

# 「公共」じいじ、ばあば 大活躍

## あなたに エール

③

### 育む

千葉原柏市の高柳コミュニティセンターで先月上旬、地域の高齢者で作る「地縁のたまご」が書道教室を開き、幼稚園から小学生が習字に取り組んだ。「たまご」とは「他人の孫」のことで、家族のように子育てをする地域作りを目指している。

講師は、同じ書道サークルに通う女性3人で、毛筆と硬筆の教室を月1回ずつ開催。費用は1回3000円と格安だ。講師の上飯屋ナリ子さん(75)が「自分らしい字が書けたね」と褒めると、子どもたちから笑みがこぼれた。「町

で会って先生」とあいさつしてくれる。子どもたちの成長が楽しみ」と目を細める。高柳地区は以前から核家族のサラリーマン世帯が大半。退職した高齢世代の多くは、地域や社会との接点を失いがちだ。一方、現役世代は共働きが多く、子どもたちは大人に触れる機会が少ない。そこで高齢者が子育てを応援する組織を2012年に作った。

代表の常野正紀さん(80)は「遠くの孫より近くの『他孫』。高齢者には生きがいが、子どもたちには社会性が育まれる」と説明する。現在、約70人が参加。小学校の調理や裁縫の授業にメンバーを派遣したり、盆踊りを主催したりと幅広く活動している。

◇ 高齢者が子育てを支える取り組みは各地に広がる。

### 子育て支援 地域社会の接点



講師の女性から「うまく書けたね」と声をかけられ、笑みがこぼれる(千葉原柏市)



「かめっ子のおばあちゃん」のころに集まった子どもたち(横浜市)

横浜市で活動しているのがNPO法人「親がめ」だ。町内会メンバーや民生委員などが自治会館や公園などで「親子のたまり場」を開催。01年に10か所が始まった活動は、現在46か所に拡大している。

市内の神之木町町内会館では先月上旬、クリスマスパーティーが開かれ、約20人が参加。7人のスタッフは、手作りの焼きイモや蒸しリンゴをチキンと一緒に振る舞った。

5か月の乳児と参加した本多みずほさん(30)は「長野出身で、地域に知り合いがいらない。子育てのベテランに相談するなどリフレッシュできる」と話す。最後にサンタの格好などをして記念写真を撮った。

「かめっ子のおばあちゃん」として活動している児玉幸代さん(77)は、2年前に遊びに来てくれた女兒のことを忘れられないという。「私のことを『3人目のばあば』と呼んで

いい?』と言われたんです。これからも子育てを支えていきたい」と力を込める。祖父向けの孫育て講座を全国で開催しているのが、大阪府立大手前高校の同窓生らで作るNPO法人「エガリテ大手前」だ。もく浴やオムツ替えを学んだ受講者450人を、「ソムリエ」ならぬ「ソフリエ」と認定。津市では11年から受講者が「ソフリエみえ」

を結成し、市の子育て支援センターで乳幼児の遊び相手になったり、学童保育の手助けをしたりと、貴重な戦力となっている。

◇

代表の川西彰さん(70)は元小学教師。名古屋市の長女宅に孫が2人いるが、会えるのは月1、2回程度。「子育て世代の力になれば、第二の人生が充実している」と話す。

NPO法人「孫育て・ニッポン」理事長の樺田明子さん(51)は「今のシニアは、隣近所で助け合った最後の世代。その経験を次代に残そうとしているのでは」と分析する。健康寿命が延び、退職後の人生も長くなっている。樺田さんは「手助けを求めている人は、実は身近な所にいる。元気なシニアは『公共じいちゃん』や『公共ばあちゃん』として、そうした人にエールを送る存在になってほしい」と話している。